

# ALAK (the Applied Linguistics Association of Korea) 2008 International Conference

矢野安剛 (早稲田大学)

2008年12月13日

大会テーマ : 30 Years of Applied Linguistics in Korea

日 時 : 6 December 2008 Seoul National University, Seoul, Korea

今大会は ALAK (韓国応用言語学会) 創設 30 周年記念大会に当たり、400 余名の会員のうち 300 名ほどの出席を見、盛会であった。同国の応用言語学研究および英語教育の指導的学会であり、AILA 理事回では 2017 年の AILA World Congress の韓国開催を提案しており、意気盛んである。

大会は全体講演 4、特別発表 3、プロモーション発表 1、研究発表 24、ポスターセッション 20、CALL Fair 発表 10 から構成されていた。プログラムは以下の通りであった。

## Plenary Speech

- I: Teresa Pica (University of Pennsylvania, USA), Educating English Language Learners for a World of Change and Opportunity: Policy Concerns, Research Responses, and Practical Applications.
- II: Yasukata Yano (Waseda University, Japan), The Role of Applied Linguistics in English Language Teaching.
- III: Kyu-hyun Kim (Kyung Hee University, Korea), Grammar and Interaction in Korean: A Conversation-Analytic Perspective.
- IV: Anne Pakir, English-knowing Bilingualism in Asia: Implications for Applied Linguistics.

## Special Presentations and Promotion Session

- Young Shik Lee (Hannam University, Korea), Fifty Years of Development in English Language Testing and the Future Research Direction in Korea.
- Haemoon Lee (Sungkyunkwan University, Korea), Interaction Theory, Cognition and SLA.
- Hoek-Seung Kwon (Seoul National University), Corpus Linguistics: Theory and Practice.
- Sam Lee (Pearson Education), Teacher Development Interactive: Knowledge, Experience, Motivation.

## Concurrent Session A, B, C, D (6 presentations each)

## Poster Session (20 presentations)

## CALL Fair (10 presentations)

全体講演は以上の 4 つが組まれていたが、最初の講演者 Teresa Pica (University of Pennsylvania) が御主人の死去で、直前にキャンセル。全体講演で、他に同時進行のセッションがないので次が繰り上げられ私が最初の講演者となった。英語が英語圏の言葉から国際語となり、非母語話者英語は無視できない存在になったこと、母語話者症候群を脱し、国際語としての英語を教育目標にすべきこと、大学英語の段階では ESP (English for Specific Purposes) と ESC (English for Specific Cultures) を加味した教育へ移行すべきことを説いた。いろいろと批判や反論が出て質疑応答も楽しめた。続く Kyu-hyun Kim の韓国語の会話分析は語法を社会言語学的な広い視野から分析したことと、学習者の母語を知る上で韓国英語教育者に示唆を与える点で価値ある講演であったが、英語に基づいた理論を

韓国語に応用する無理が多少感じられた。最後の Anne Pakir は彼女の持論の Glocal English の勧めであったが、global の国際理解度と local の文化・伝統・風土の表現媒体としての地域的慣用表現の融合についての具体的説明や提案が欠けていた。

特別発表の3つは同時進行だったので Young Shik Lee (Hannam University)を聞いた。過去50年の韓国における英語教育テストの歴史を pre-scientific, psychometric and structuralist, psychometric and semi-communicative, and communicative の4つの時期に分けて概観したが、最後の communicative でもいまだに one-directional であると批判し、bi-directional にすべきだと説く。だが、OPI (Oral Proficiency Interview)は理想的ではあるが、莫大な費用と人的労力が必要なので現実的ではないとの感想をもった。

研究発表を概観すると、研究発表は教授法、評価、ICT技術の応用など実際の英語教育に直結したものが多かったが、これは会員がほとんど現職の大学英語教員であることから自然な成り行きであろう。また、1日しかない大会なので仕方がないと思うが、わずか10分のコーヒーズブレイクが午前午後で1回ずつ、ランチブレイクも50分のみで、懇親会もなく、講演者、研究発表者、参加者が意見交換をしたり、議論する時間的余裕がなかった。

30周年だからと全体講演者として招かれたこと、Sunhae Hwang 会長はじめ、Youngkyu Kim, Young Shik Lee など役員に AILA 国際委員会の仲間が多いこともあり、私は前日の ALAK 理事との会食、大会当日の ALAK 幹部との昼食会と夕食会といろいろと意見交換をしたり、来るべき AILA World Congress 開催への助言などもする機会があった。彼らの意気を感じて謝礼 (US\$300.00) は ALAK に寄付した。いままで暖かかったのが、私が来た当日急に零下14度という寒波が来襲し、お前が寒さを連れてきたと言われた。freeze maker とか cold wave bringer とか言ってみた。このような非母語話者の創造が母語話者に受け入れられるかどうかは別として理解はされた。